MASHIKO MUSEUM OF CERAMIC ART

回覧

益子陶芸美術館

2026年度
〔企画展案内〕

■笹島喜平館

益子出身の木版画家　笹島喜平の作品を展示しています。笹島は棟方志功に師事し、やがて版画の表面に凸凹が残る"拓刷り"という技法を生み出しました。

■旧濱田庄司邸

濱田庄司が実際に住んでいた茅葺の邸宅を移築し公開しています。町文化財。

■登り窯

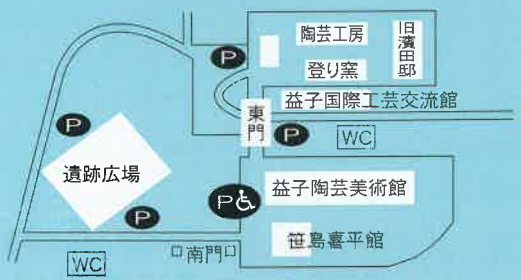
濱田庄司が生前に愛用していた登り窯を移築復元しました。

■サロン（ミュージアムショップ）

お好きな益子焼のコーヒーカップを選び、挽きたてのコーヒーをお召し上がりください。
＊入館無料

■益子国際工芸交流館
［Mashiko Arts & Crafts Residence］

世界各国の代表作家や若手作家の交流事業を開催し、作品創作や人材育成など学びと交流に繋がる施設。



春と秋の陶器市期間中は上記の駐車場は使用できません。

■開館時間

9:30~17:00（2月から11月）　※入館は16:30まで
9:30~16:30（12月から1月）　※入館は16:00まで

■休 館 日

月曜日（祝休日の場合は翌日）、5月7日（木）、11月4日（水）
但し、5月6日（水）、11月2日（月）は開館
年末年始休館　12月26日（土）～2027年1月2日（土）
*他に展示替えによる臨時休館があります

■入 館 料

益子陶芸美術館、笹島喜平館　共通
［一　　般］　600円（550円）
［小中学生］　300円（250円）　※（ ）内は20名以上の団体料金
［65歳以上］　300円　※個人団体共に
（受付にて年齢確認出来るものをご提示下さい）
※特別展料金の場合があります
入館無料：サロン（ミュージアムショップ）、ミニギャラリー、旧濱田庄司邸、登り窯
入館無料日：6月14日（日）　栃木県民の日〈6月15日（月）〉に替わり入館無料

■交通案内

【バ ス】東武宇都宮駅、JR宇都宮駅（西口14番バス乗り場）から関東自動車バス
益子行、または秋葉原駅より茨城交通高速バス「関東やきものライナー」
笠間・益子行、益子陶芸美術館入口下車徒歩2分
【Ｊ Ｒ】小山駅から水戸線下館駅下車、下館駅から真岡鐵道益子駅下車
徒歩25分
【自動車】常磐道友部JCT経由、北関東道桜川筑西ICから20分
東北道栃木都賀JCT経由、北関東道真岡ICから25分

※陶器市期間中、美術館の駐車場はご利用いただけません

益子陶芸美術館
〒321-4217　栃木県芳賀郡益子町益子3021
TEL.0285-72-7555　FAX.0285-72-7600
www.mashiko-museum.jp/

■企画展

2026

4月

3月8日(日)～5月17日(日)

金重有邦 土のコトダマ
Yuho KANESHIGE

金重有邦(1950～)は備前で制作する陶芸家です。武蔵野美術大学彫刻科で学んだ後、父・素山のもとで本格的に陶芸を始めました。現在は「田土」と呼ばれるきめ細やかな備前の土に立ち返り、主に茶碗の制作に集中しています。用と美の双方を追求する有邦の茶碗には、独自の思想と造形が色濃く現れています。本展ではこの10年間で制作された茶碗を中心に、最新作を含む約80点を展覧します。備前の風土と対話することで生み出された作品の数々をご覧ください。

金重有邦《伊部茶盌》2020年
グレンバラ美術館

5月

2階展示室 スポットライト:戸田浩二 儚水揺
【Thematic Exhibition】Koji TODA
静謐で凛とした焼締陶、戸田浩二の最新作を紹介します。

戸田浩二《焼締儚水揺》2025年

展示替えのため休館 5月18日(月)～6月6日(土)

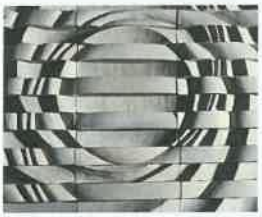
6月

6月7日(日)～8月23日(日)

栃木県文化功労者受章記念 環境陶芸の地平 藤原郁三
Ikuzo FUJIWARA: Frontiers of Architectural Ceramics

7月

「陶壁」とは陶素材による壁面装飾で、戦後に登場し、主に1970年代から多く用いられるようになった名称です。本展では一昨年に栃木県文化功労者となった、益子を拠点に活動する陶壁作家、藤原郁三(1946～)の仕事を紹介します。これまで手がけた作品は、全国約700箇所にも及びます。藤原が取り組む陶壁作品「列、合、重、動、集、表出、面、相、立」について、写真や図面、模型を中心にご覧いただきます。


藤原郁三《白い大地一生命》1982年
栃木県立博物館企画展示室

8月

展示替えのため休館 8月24日(月)～9月5日(土)

9月

9月6日(日)～11月29日(日)

江崎一生・加守田章二・森陶岳 1969-71 | 変容する陶の交差
Issei EZAKI, Shoji KAMODA, and Togaku MORI
1969-71: Intersections of Transforming Ceramics

10月

1969～1971(昭和44～47)年の3回にわたり、東京・有楽町の交通会館ギャラリー・手において、「江崎一生・加守田章二・森陶岳」の三人展が開催されました。東京国立近代美術館の工芸課長であった吉田耕三によって企画され、当時最も活躍していた作家が選ばれました。これまでにない創造的な陶芸作品を制作することを吉田はテーマとして提示し、作家たちはこの趣旨を忠実に守り、毎年新たな作風の作品を制作しています。

本展では同展の再現を試みるべく、出品作を中心に紹介し、改めてその魅力に迫ります。

加守田章二《曲線彫文壺》1970年
益子陶芸美術館

11月

10月20日(火)～11月23日(月・祝)

<笹島喜平館>日本拓版画会展2026
<Sasajima Kihei Hall> Japan Takuhanga Print Society Exhibition 2026
日本拓版画会のメンバーによる拓刷木版画の世界を紹介します。

展示替えのため休館 11月30日(月)～12月12日(土)

12月

12月13日(日)～2027年4月4日(日)

2027

益子国際工芸交流事業共催 ジェニファー・リー
Jennifer LEE

1月

益子陶芸美術館では、益子国際工芸交流事業として現代イギリスを代表する陶芸家、ジェニファー・リーを招聘し、約2ヶ月間アーティスト・イン・レジデンスを実施するとともに、同事業と連携した企画展を開催します。

ジェニファー・リー(1956～)はスコットランドに生まれ、1975年にエディンバラ・カレッジ・オブ・アートで陶芸を学び、1980年からロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)にて陶芸を学びました。手びねりをする前に酸化金属を混ぜ込み、土を着色するという手法を発展させながら制作をしています。酸化物が互いに反応し合うことで帯状の輪となり、移り変わる輪の色彩を追求しています。

2月

本展では初期から最近の作品と、さらに益子国際工芸交流事業レジデンスプログラムで今回制作した成果作品も合わせて展示します。

ジェニファー・リー
《ブルーの鉢(オリーブ色に縁取られた、光輪がかかった泥炭の帯)》2013年
益子陶芸美術館

3月

※展覧会およびスケジュールは変更になる場合があります。